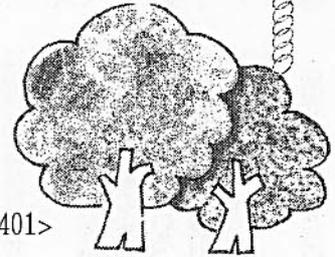


想随ル



<401>

米屋として明治十年に創業し、現在の場所(魚町二丁目)で明治三十年から営業を続けています。その間二度の大火に遭い、今の建物は昭和五年に建てた築七十五年のもの。内部は改装しているものの、外観は当時のまま残っています。

かかない。しかも居間と台所の間に土蔵が陣取り、決して使いやすい家とは決して使われない。

「昭和五年で、前年に大火がありました」と、

「横濱からです。奥に蔵が見えたので。いつ建てられたのですか」

「昭和五年で、前年に大火がありました」と、

「あがらいんや」の心で

武山 せい子

良いものを残していこうという気概よりも、むしろ直す理由がないのでそのまま残しておいたというのが真相のようです。

建築当時を詳しく知る人はいませんが、約四十五坪の三角形の敷地に住居、店舗、倉庫の機能を果たそうとしたのでしょう。階段は急で転びやすく、天井が高く暖房は効

言えません。

さらに、三人の子供のうち一人は土蔵に頭をぶつけて流血騒ぎ、また一人は鍋にぶつかって火傷をしたり、家の中で負傷することもしばしば。か

は...と一様に感心し、私達もまた、先代の家への心づかいに改めて感謝しているところ。です。

我が家ではみなと祭り

建前から我が家の歴史に、そして気仙沼の文化に話題が広がります。何よりも好奇心旺盛な家族です。珍客賓客大歓迎というのが一番の理由です。私達の暮らしをお話することで、気仙沼をより知ってもらえたら嬉しいのです。そのお客

なと思うと満たされた気持ちになります。

「はまらいんや」には楽器と踊り手が要るのと同様、建物も人とその土地の三つが重なってはいけません。我が家の「あがらいんや」は、築七十五年の年輪を数えた太鼓と、八十四歳の父、七十

七歳の母、五十六歳の主人、五十四歳の私、合わせて二百七十一の馬力を持った踊り手がお客様を迎えます。そして「あがらいんや」の一言。この一言が、見知らぬお客様でも瞬時に距離を縮めることができる魔法の言葉なのかもしれません。

また、八年前から始まった「目黒のさんま祭」にも初回から参加させていたたいいます。

「目黒のさんま祭」では外に向けて、我が家の「あがらいんや」では、こちらに向かって来る方へ心意気を伝えることができます。

自分がしたことでもないのに、何だか自分が褒められた気分になります。それがたまらなくて今日もまた「目黒のさんま」とあがらいんやです。

こつとして楽しく暮らせるのも、先人が育てた気仙沼、先代がつくった建物があるからこそ。そして、多くの方々との出会い

に恵まれたからだと主人といつも確認しあっています。その恩恵に感謝しながら、これからも住み続けたいと思います。

また、風待ち研究会の皆さまとの出会いは、日常生活の中にあつた素晴らしい再発見するようになりました。本当にありがとうございます。

【筆者紹介】

気仙沼市浜見山。次回は斎藤嘉一郎さん 武山さんから斎藤さんへ一言。斎藤さんはじめ風待ち研究会の皆様のお陰で、NHK収録や文化財登録のお話など刺激的な日々が当分続きそうです。生活にハリがあります」

【筆者紹介】 鼎が浦高校から東京の佐伯栄養学校へ進む。卒業後は、栄養士として病院や学校に勤務。現在は家業の武山米店に。目黒のさんま祭り副実行委員長の。趣味は料理とガーデニング。五十四歳。

